

久留米の自然



久留米の自然 115号
2012年5月1日

イラガイツツバセイボウ

学名 *Chrysis shanghaiensis*

撮影日 2011年10月6日

撮影場所 久留米市上津町浦山公園

撮影者 大木 武彦



イラガイツツバセイボウ

大木 武彦

イラガイツツバセイボウは体長 10mm~15mm の青緑色に輝く青蜂である。触角や肢の基半は金緑色である。口辺や胸部小楯板や腹部の第一節、第二節の側方に黄緑色、中胸背板や第二腹節の前縁に紫色の配色が見られ、第三腹節後縁に明らかに名前の由来の5歯状突起がある。実に美しい金属光沢の生きた宝石である。成虫は6月末~7月に初羽化し、10月頃まで見られる。膜翅目セイボウ科の中で唯一鱗翅目寄生種としてイラガを寄主とする。学名のクリシス シャンハイエンシスからもわかるように中国中部が原産地で、明治の終わりから大正の初めに上海から偶然にもちこまれたとされる。1914年九州柳川で記録されて以来、しだいに北上し、九州、四国、本州に知られ、本種の分布する地方ではその寄主のイラガの発生量は少ない。関西地方でイラガが激減したのは本種

の貢献であるとされる。近年イラガも本種も我々の里村から姿を消して、山あいの雑木に細々と余命をつないでいるとき、浦山公園のサクラの樹で観察できたことは幸運の一語であった。

以前、自宅の庭にあった柿の葉についたイラガの幼虫の刺毛に触れて、その激痛に驚いたことがあったが、このイラガの幼虫は冬枯れした木の幹や枝の股を利用して美しい楕円形の白色の地に、両端と側面の斜紋に茶色を配したスズメノショウベンタゴと呼ばれる堅い繭を固着させる。イラガイツツバセイボウはこの越冬繭に長い産卵管で穿孔して、中のイラガ幼虫に一粒を産卵する。したがって冬から春先にかけてこのイラガ繭を採集しておく、そのなかの幾つかから6月頃美しいイラガイツツバセイボウが羽化してくる可能性が高い。

久留米市の蝶 47

クロセセリ

国分 謙一

家屋等で日当りの悪い北側には、料理の薬味としてお馴染みのミョウガを植えている家庭が多くあります、そのミョウガを幼虫が食べる蝶がいます。羽の表も裏も黒いので黒セセリ、名前の通り黒色で前翅に白い紋があり、日本では間違うような蝶はいませんから一目で判ります。

解らないままになるのか？

昨年の7月にテレビがデジタル放送に変更されたので、ブラウン管方式の白黒テレビを見ている家庭は無くなったと思われます。この白黒テレビに誘引されたとの観察記録が熊本であり、庭から家の中の放送中のテレビ画面まで多い時は8回も往復したとされています、蝶が飛ぶ時には白い紋がチラチラと見えますから、放送画面がちょうど蝶が飛んでいるように見えたのだと思われます。性別は書いていないのですが、多分画面が雌が飛んでいるように雄には見えたとは私は解釈しています。ただし7時ころから10時ころまでの午前中だけで、午後は飛来しなかったとのことですが、なぜかは調査されていません。

人間による分布の拡大？

クロセセリの棲息地は九州だけで、門司には棲息しているのに海を隔てた下関市には棲息していませんでしたが1978年に確認されました。関門海峡が成り立ったのは地質的には最後の氷河期以降だと思われますから、蝶が門司まで進出してきたのは非常に新しく、数千年ほど前だと思われます。この幅一キロほどの距離を自然状態ではクロセセリは飛び越えることができなかつたほど移動が少ない蝶と思われます。また近年、飛び離れた京都周辺でも採集され始めましたが、下関市と同じく

幼虫の食草がミョウガなので、ミョウガを移植したときに卵や幼虫が移動したと思われます。

幼虫でも越冬する

福岡県でクロセセリが幼虫でも冬を越すことが出来ると解つたのは50年ほど前です。ほとんどは死滅するのですが暖冬では生き残るのでしょうか。熱帯地方が棲息地ですから、越冬という概念が無いのでは、冬でも暖かい八重山地方では周年みられるそうですので、越冬と言い表して良いものかは分かりません。

調べて下さい

現在、自然保護と言われ昆虫や植物の採集が難しくなつてきています。特に蝶は全て判っているから本を読めば判ると言う方もおられます、しかし判っていないのが現状です。

クロセセリの分布を調査してください。データが古いのですが1958年の報告では、英彦山では非常に少ない蝶で1957年に標高670m.で1932年に次いで2回目として記録されました。私は標高の違いによる気温の差が影響しているではと思いますが、理由は詳しく調べられてはいないようです。久留米市では田主丸町の鷹取山は802mありますのでハナミョウガ、ミョウガの分布と合わせて調査されては如何でしょうか。貴方の観察で図鑑の記述を変えるかも知れませんが、またなぜ自然状態では関門海峡を渡ることが出来なかつたのかが解るかも知れませんが。

久留米市産と比較して

今はあまり使用されることもありませんが、八重山諸島のものは、小さくて斑紋にも違いがあるとして1962年に亜種として区別されました、この時に比較された標本の中に久留米市産のものが含まれています。

郷土の樹木 17

ヤマモモ

猪上 信義

ヤマモモ科の常緑高木。樹高 10m 前後、下方から数個の枝に分かれ、主幹が分かりにくい樹形です。樹皮は初め赤味を帯び、後に灰白色となります。葉は硬く、広披針形で長さ 5~10cm、幅 2~3cm、先は鈍く、下部は楔形、両面無毛で、葉裏に透명한油点があります。

成熟枝の葉（左）はほぼ全縁ですが、若い枝の葉（右）には大きな粗い鋸葉がでます。



3~4 月頃葉腋に穂状の赤い花をつけ、雌雄異株。果実は多汁質の核果で直径

1.5~2.0cm くらい、6 月頃赤黒く熟し（稀に赤い色素を欠くシロヤマモモがある）、食べられます。国内では西南日本の海沿いの地域に自生し、朝鮮半島南部、中国中南部、フィリピンなどにも分布します。

昔から食用とし、縄文時代の遺跡から大量に出土します。今日果物店の店先に並ぶものは野生種の欠点である可食部が少ないこと、酸味やヤニ臭が強いこと、隔年結果などを改良しています。中でも「瑞光」という品種は直径が 2.5~3.0cm あり、甘みが強く、日持ちがよく、徳島県などで栽培されます。野生種も含めて生食の他、ジャム、果実酒などにも加工されます。

樹皮にはタンニンを多く含み、昔から皮なめしや漁網を染めるのに用い、また大島紬や黄八丈の染料とします。また薬用（楊梅皮という）として下痢止め、やけどの治療、利尿、血管補強などに用いました。

材は硬い（比重 0.72 程度）が、直材が採れにく

く、しかも捻じれるため、小型の器具材（特に木製のボタン）、燃料などに使われる程度です。

根には空中窒素を固定する根粒菌をもつため、痩せ地や砂地の肥料木として、各地に植えられました。加えて乾燥や大気汚染に強い性質を生かして、市街地の緑化木としても使われています。

福岡県内では海拔 200m 以下の低山地に多いのですが、時には 600m 近い山地にも見られます。久留米市では高良山付近の天然林の尾根筋や岩石地に多く、他では久山町猪野皇太神宮裏山や宗像地方低山地などの天然林や岡垣三里松原他開眼のクロマツ林内でもよく見られます。

通常は大きくても幹周り 1.0~1.5m 位ですが、静岡県伊東市のお寺には幹周り 2.5~4.2m に及ぶ 3 本株のヤマモモがあり、国の天然記念物になっています。本県那珂川町市の瀬にも県天然記念物の木があり、説明書きには幹周り 6.0m とありますが、根株の腐朽が著しく、とてもそんな大きさには見えません。

中国から日本にモモ（バラ科）が伝えられる以前（弥生時代に伝えられたが、一般に広く栽培されるようになったのは江戸時代頃）はこれをモモといい、中国から入ったものをケモモと呼んだようですが、この栽培が盛んになるにつれ、名前が入れ替わったそうです。ちなみに久留米地方ではヤンモモという方言が残っています。昔はこの実が熟する頃が田植えの時期とする地方もありましたが、技術革新で田植えが早まり現在では当てはまらなくなりました。

水上勉の出世作とされる推理小説「霧と影」（1959）は若狭湾（ヤマモモの北限自生地のひとつ）を舞台として、この実が推理の重要な役目を果たしているそうですが、今日のように野生のものをあまり食べなくなり、時期になると果物店に並ぶような時代には通用しない筋書きです。それより前この小説の存在を知る方はかなりの年配の方で、しかもよほどの推理小説ファンかもしれません。

高良川流域のキノコ(その17)

角 正博

前回はウロコタケ科 Stereum (キウロコタケ) 属について述べました。今回は、ウロコタケ科 Xylobolus (カタウロコタケ) 属のモミジウロコタケと Lopharia 属のクシノハシワタケについてです。

31. モミジウロコタケ(紅葉鱗茸) Xylobolus spectabilis (写真1)

高良山系では、ごく普通にコナラ、コジイ、アラカシなどの広葉樹の枯れ木に多数重生している姿をみることができます。子実体は薄い革質で、一年生です。傘は扇状で、かなり深い切れ込みによって掌状に裂けています。さらに傘は乾燥すると、掌状に裂けた各片が両側から強く内側に曲がります。傘の表面(上面)は黄褐色～茶褐色で、絹糸状の光沢があり、環紋があります。子実層面(子実層托)は平滑で、灰白色です。新鮮な子実体の子実層面を傷つけると、赤褐色の汁が滲みます。白色腐朽菌。



写真1

32. クシノハシワタケ Lopharia mirabilis (写真2)

高良山系では、広葉樹の立ち枯れした樹幹や落枝などにたまにみられます。子実体は半背着生で肉は白色、革質で膜状に広がり、上縁が反転して狭い棚状の傘を作ります。傘の表面(上面)は汚黄白色です。子実層面(子実層托)は灰白色～淡灰褐色で、大小高低とも不規則な薄歯状～犬歯

状の小突起を著しく密生するものまで変化がさまざまあります。突起の配列は不規則で、ときにやや同心円状となります。白色腐朽菌。



写真2

久留米市農政部生産流通課との話し合い

大木 武彦

3月23日に『四季の森ふれあい教室指導者連絡会議』が開かれ、久留米市農政部生産流通課と話し合いがもたれました。平成24年度四季の森ふれあい教室の事業内容について、生産流通課から以下のような提案がありました。(1)24年度も従前通りの運営方針を維持したい。(2)事業が若干マンネリ化してきているので、アイデアを出し合って変化をもたせたい。(3)基本的には高良山一帯をベースとして行事回数を増やしたり、内容を増やす等、厚みをもたせたい。(4)指導者団体が一団体減少したので、補充のための新しい団体を紹介願いたい。(5)まったく異質の団体との共催を24年度中に年1回～2回試行的に行い、結果が良ければ25年度に本格化させたい。(6)当会、自然を守る会関連では「高良山樹木の名札付け」をふれあい教室の年間スケジュールに1回分増加として入れる案、12月の「キノコ観察会」を「探鳥会」と合同で行う案等が出された。

各団体からの要望の主なものとしては、(イ)参加者が集合場所を間違えないように、看板の掲出等を確実にすること。(ロ)小冊子、耳納連山「自然歩道ガイド」(昭和57年3月久留米市発行)が30年を経過して、内容に現状と合わない部分が見られるので新版の発行を検討されたい。などであった。その他にも活発な意見交換がなされました。

生き物に魅せられて その53

アリと粘菌の巻

松永紀代子

2011年6月、九州北部は梅雨入りしたばかりだった。庭のグミの衰退木には、白や肌色のべったりしたキノコがムクムク広がっていた。そんな白いキノコの小さな割れ目に、黄色いゴム質のものを見つけた。粘菌だ。これからどんどん形を変えていこう。

黄色の変形体はじわりじわりと場所や形を変え、そのうち白いキノコを食べつくした。

この木にはもちろんアリもやってくる。ふ～ん、アリは粘菌の縁沿いの外側を歩くんだ。なぜだろう・・・。プ～んと手にとまったカ、パンとたたき、変形体の縁から2cmほど入ったところにおいてみた。

1匹のアリが早速気がついた。カの方に行きたいらしい。縁から少し入っては戻り、入っては戻りしている。アリはなんだか歩きにくそうだ。そのうち、変形体の薄い部分からカにたどりついた。餌をもちあげようとする。が、なかなか動かない。アリの足ももつれるような感じだ。仲間のアリたちは、最初のアリが通った後をわりとすんなり歩いていった。餌の周りを囲んだアリたちはなんだかヨタヨタしている。べとつくのだろうか。それでもなんとか餌を運び終えた。

その後変形体のない部分においてみたカ、こちらはどんどんアリたちに囲まれ、簡単に運ばれていった。

ひととき 動物笑話 その59
カピバラ 米田 豊

「先日、親父と温泉に行った時、浴槽にいる親父を見て、ある動物を思い出して笑ったよ」「親父さんが太っているなら、カバかい?」「いや、カピバラさ。知っている? 幾つかの動物園から冬季にお湯につかる姿が放映され、最近ではテレビのCMに出ているから」「うん、南米産の世界最大のネズミの仲間だろう。頭が意外に大きく、ヌーボーとして愛嬌も感じられる奴だね」「そう、親父の干支はネズミだが、チョロマカしてなく、おうようで雰囲気がとても似ているんだ。目を細めて気持ちよさそうにつかっている姿はまさにカピバラだよ」「親父さんは何か言わなかった?」「[カバでなくて良かったよ]と笑っていたよ。そして[訓練して頭にタオルでも乗せさせると入園者が増えるかも]と真面目な顔で言っていたよ。

*ネズミ目のカピバラ科に属する。体長が約1.3m(尾は退化)、肩高が約50cm、足に水かきがあり、泳ぎと潜水が得意、水辺の低地に分布し、肉用として家畜化もされている。

高良川流域の地衣類(その5)

角 正博

3. 高良川流域の地衣類の生育環境のあらまし
さて高良川流域では、どこにどのような地衣類が生育しているのでしょうか。裏返せば、どのような環境・場所を探せば、どんな種類の地衣類を観察することができるのでしょうか。

高良川流域の植生は、大きく(1)スギ・ヒノキ林の植林地と(2)アカマツやコナラの二次林が放置されて生じたコジイの萌芽林にわけられます。しかし、これらの林内は暗くてあまり地衣類は見られません。どちらの場合も、むしろ林縁の樹幹や露岩など、日当たりのよい場所に多くの地衣類を見ることができます。さらに地衣類の多くは樹幹や石垣に着生する形で生育しているので、

(3)社寺や墓地および公園に植栽されたサクラ、ウメ、ケヤキ、カエデ、ツバキ等の日当たりのよい樹幹、あるいは社寺や墓地および公園の日当たりのよい石碑や石垣、時にコンクリート建造物も、地衣類にとっては重要な着生基物となります。以上3つの環境とそこに生育する地衣類について述べてみます。

(1) 山地のスギ・ヒノキ林や林道の露岩

高良川流域の山地では、谷沿いにスギ、中腹から尾根にかけてはヒノキが植林され、暗い植林地内にはほとんど地衣類は見られません。それでも林縁のスギの樹幹には、ゴフンゴケ、陰湿な日陰の樹幹や露岩、石垣上にはダイダイサラゴケが生育していることがあります。また林道沿いの日当たりのよい開けた露岩には、ヒメレンゲゴケ、コナアカミゴケ、トゲシバリ、ヤマトキゴケ、アリノタイマツ、レブラゴケ属などがみられます。さらに林道沿いに植栽されたサクラ並木やツツジ公園などの明るい場所には、サクラの樹幹やツツジの枝上にヒカゲウチキウメノキゴケ、クズレウチキウメノキゴケ、マツゲゴケ、ウメノキゴケ、キウメノキゴケ、ハクテンゴケ属、コフキジリナリア、モジゴケ属などがみられます。このうちウメノキゴケ類は、林道のガードレール上にも着生したりしています。



ダイダイサラゴケ

久留米街中の湧水を見直そう

久留米市文化財専門委員 高山 美子

筑後川の源流の1つ久留米市朝妻に湧き水が昔から豊かにコンコンとあふれ出ている。大きな鯉が泳ぎ夏でもたくさんの大樹に囲まれ涼しくホタル舞うこの地は別天地であった。

この断層湧水群はJR御井駅から約1km並行に続いている。つい最近この場所が埋め立てられ池や湧水・小川が水路工事の為変えられていくのを知り、ホソバミズゼニゴケの群生を発見した為関係者や有識者に急ぎ現場に集まってもらい今後の工事の有り方について、各方面からの意見と、改善部分話し合った。

○平成24年4月7日、現地調査に入ったところすっかり水路はなくなりブルドーザーで整地されていた。

大きな黒色パイプ管を土中に埋設し、一面さら地となり、JR久大線北側の湧水地は石や土で狭く埋め立てられ鯉はもういなかった。

○東側ブロック壁駐車場にそって新しい水路の工事予告のためかピンクの色の印がついた棒が立っている。路地東側にただ1ヶ所だけ80cm四方のコンクリートの小さな排水マスがあり、ふたを開けて下をのぞいたらものすごい速さで水が流れていた。



ホソバミズゼニゴケ 2012.3.19池田洋介氏撮影

今後問題点を提起したい。

①この湧水群は災害時や有事の時に、命の生活水として使用できるよう今の時点から考えて工事を進めてほしいこと。これは、世界基準の水活用法である。

②今後この湧水をいかにして下流に活かすか。この街中にありながら永年「清水館」の庭として自然が手つかずの状態に残っている珍しい場所であり、湧水池に自生しているホソバミズゼニゴケは食用にもなり、今後久留米の珍味として育てて行きたい。

③JR久大線久留米大学前駅から歩いて1分の土地であり、国道210号線とはさまれた街中であるにもかかわらず湧水が豊かに流れる西側には久留米市の市民の森があり「名水パワースポット」として重要な場所である。



清水館跡地と楠並木 2012.3.20撮影



工事関係者と自然を守る会会員

他有識者たちの話し合い 2012.3.20撮影

例会報告

第394回例会

高良山キノコ観察会報告

角 正博

去る2011年12月4日(日)に第394回例会高良山キノコ観察ときのこ汁会を行いました。例年どおり、久留米市生産流通課との共催で四季の森ふれあい教室を兼ねていますので、観察ルートも竹の子コースを上り、奥の院を回って森林公園で昼食、帰りはつつじ公園から菖蒲池、後谷管理道をたどって下るコースで行いました。今回も例年好評な「高良山用きのこ観察ビンゴ2011年改訂版」(製作:角)を用いて、キノコの名前を覚えてもらうことにしました。昨年の「きのこ観察ビンゴ」が良かったのか、今年は、昨年参加された日本ボーイスカウト広川第一団が34名の大人で参加され、賑わいました。今回も「きのこ観察ビンゴ」でキノコ探しに熱が入りましたが、総勢54名では、解説する際にはやや多すぎて、迷惑をかけたのではないかと思います。今年は雨が少なく例年に比べキノコの発生が少なかつたのも残念でした。また今年はビンゴの景品が皆さんの期待に反して、今一つだったので、来年の参加者数をちょっと心配しています。さらに今年も「高良山系の晩秋から冬の主なキノコ」の「写真パネル」を作成し、昼食時に写真パネルを用いた解説を行いました。今回も、キノコ観察の人気の高さに比べて、キノコ観察の指導者の不足、スタッフの不足が明白となり、課題を今後に残しました。

以下に当日観察できたキノコリストをあげておきます。

1. *Hygrocybe* アカヤマタケ属ベニヤマタケ(紅山茸) 節の一種(地上)、2. *Pleurotus ostreatus* ヒラタケ(平茸)(広葉樹倒木)、3. *Mycena* クヌギタケ(栴茸) 属の一種?(地上)、4. *Cyptotrama asprata* ダイダイガサ(橙傘)(広葉樹腐落枝)
5. *Xeromphalina campanella* ヒメカバイロタケ(姫蒲色茸)(スギ倒木)、6. *Naematoloma fasciculare* ニガクリタケ(苦栗茸)(スギ・広葉樹倒木)、7. *Russula omiensis* カラムラサキハツ(辛紫初)(地上)、8. *Lactarius camphoratus* ニセヒメチチタケ(偽姫乳茸)(地上)、9. *Craterellus cornucopioides* クロラッパタケ(黒喇叭茸)(路傍土崖)、10. *Xylobolus*

- spectabilis* モミジウロコタケ(紅葉鱗茸)(広葉樹倒木)、11. *Stereum ostrea* チャウロコタケ(茶鱗茸)(広葉樹倒木)、12. *Microporus flabelliformis* ウチワタケ(団扇茸)(広葉樹倒木)
13. *Oxyporus cuneatus* ヒメシロカイメンタケ(姫白海綿茸)(スギ切株)、14. *Tyromyces sambuceus* シロカイメンタケ(白海綿茸)(広葉樹倒木)、15. *Pycnoporus coccineus* ヒイロタケ(緋色茸)(広葉樹倒木)、16. *Daedalea albida* ヒメシロアマタケ(姫白網茸)(路傍杖)
17. *Trametes palisotii* チリメンタケ(縮緬茸)(広葉樹落枝)、18. *Coriolus versicolor* カワラタケ(瓦茸)(広葉樹倒木)、19. *Lenzites betulina* カイガラタケ(貝殻茸)(広葉樹倒木)、20. *Trichaptum bifforme* ハカワラタケ(歯瓦茸)(サクラ落枝)、21. *Daedaleopsis styracina* エゴノキタケ(エゴノキ倒木)、22. *Daedaleopsis purpurea* ミイロアマタケ(三色網茸)(広葉樹倒木)、23. *Truncospora ochroleuca* ウズラタケ(鶉茸)(広葉樹落枝) 老菌、24. *Amauroderma rugosum* コマタケ(独楽茸)(ブナ科林内地上) 老菌、25. *Ganoderma astrale* オオミノコフキタケ(大実の粉吹茸)(広葉樹立ち木)、26. *Cyclomyces fuscus* ワヒダタケ(輪襷茸)(広葉樹倒木)、27. *Cyclomyces tabacinus* キヌハダタケ(絹肌茸)(広葉樹地際)、28. *Inonotus xeranticus* ダイダイタケ(橙茸)(腐切株)
29. *Schizophyllum commune* スエヒロタケ(末広茸)(倒木)、30. *Astraeus hygrometricus* ツチグリ(土栗)(路傍土崖)、31. *Scleroderma verrucosum* ザラツキカタカワタケ(粗付硬皮茸)(林内地上)、32. *Calostoma japonicum* クチベニタケ(口紅茸)(路傍土崖)、33. *Lycoperdon pyriforme* タヌキノチャブクロ(狸の茶袋)(腐木上)、34. *Auricularia auricular* キクラゲ(木耳)(広葉樹倒木)
35. *Auricularia polytricha* アラゲキクラゲ(粗毛木耳)(広葉樹立ち枯れ)、36. *Exidia glandulosa* ヒメキクラゲ(姫木耳)(広葉樹落枝)
37. *Diccephalospora rufocornea* ニセキンカクアカビョウタケ(偽菌核赤銜茸)(広葉樹落枝)
38. *Xylaria polymorpha* マメザヤタケ(豆莢茸)(広葉樹立ち枯れ木の地際)、39. *Hypoxylon truncatum* クロコブタケ(黒瘤茸)(コナラ落枝)

日本ボーイスカウト広川第1団ビーバー隊

隊長 永松美穂子

今回「高良山きのご観察会ときのご御飯汁会」に参加させていただきありがとうございました。37名の親子で参加することができ大変いい思い出となりました。秋晴れに恵まれ高良山の紅葉が大変きれいかった事。山道を歩き自然とふれあう中出会うきのご達の顔が見れて自然をたっぷり満喫することができました。年長から小学校1年生のやんちゃなスカウト達です。周囲の皆様に先生方に大変ご迷惑をかけた事と思いますがこのスカウト達がこの先1年後2年後と成長する中で皆様に出会ふれあった事やその中の出来事が一人でも多く心に残る思い出となればと心から願い感謝とします。ありがとうございました。

第395回例会総会記念講演会

温暖化による生物への影響

河内 俊英

これまで地球は、寒冷になったり温暖になったりを繰り返してきましたが、現在温暖化で問題になっているのは、20世紀になってから短期間に大幅な温暖化を示している傾向についてです。この100年間で地球上の気温は、0.8度前後上昇しており、さらにこの傾向が継続しており、その原因は人為的活動の結果と考えられています。

温暖化の被害は、まず異常気象という形で問題が出ています。その例として日本では、夏の猛暑日の日数の増加や集中豪雨、大型台風の頻発、大雪などとしてあらわれています。

世界的にも旱魃と洪水が地球規模の範囲で頻発しています。

温暖化の直接的な被害として、健康被害と農業被害をあげます。健康被害としては、これまで熱帯地域の病気だった蚊の媒介によるデング熱、マラリア、黄熱病や脳炎（日本脳炎も含む）などの北進傾向が心配されています。さらに米国科学アカデミーは温暖化でペストやコレラなどがの増加を心配しています。また干ばつや洪水で食糧不足と栄養不足があり、洪水による衛生状態の悪化による病気の発生も心配されています。これまで少なかった暖地の害虫の多発に対する農薬使用と

その残留による農薬中毒などが懸念されます。

農業被害として温暖化によって害虫の種類と数の増加に対する殺虫剤の多使用の問題があります。気温上昇により害虫が従来生息していた熱帯から緯度の高い新たな生息地に移動定着することが可能になるのです。そのため病害虫の発生数が増加し、農薬使用量も増加することが心配されています。また現在九州では、高温障害として、コメの品質低下がみられ、その対策用に新たな品種開発がされています。ブドウの着色不良や成熟期の高温によりミカンの浮き皮が発生して品質低下が起きています。洪水や台風による農業被害も増加しています。

温暖化の影響は、地球全体の生物に影響し、絶滅の危機にある生物も少なくありません。人気のタテゴトアザラシは、北極海の海水の上で出産します。ところが、出産期（3月上旬）の海水の面積が年ごとに激減しています。2007年は、およそ10万頭ものアザラシの赤ちゃんが、氷が早く解けすぎたことが原因で死亡したと推定されています。

身近な昆虫の北進の例として、ナガサキアゲハは関東まで分布が拡大、またクマゼミは北陸・北関東まで発生地域が拡大しています。またタテハモドキは、南九州限定から佐賀・久留米・福岡まで広がっています。

海でも温暖化傾向が出ており、冬季の海水温は過去100年間で1.1~1.6度上昇し、サンゴの北進（千葉県館山沖）が知られています。日本近海のサンゴは、年間14キロのスピードで北進しているとの報告があります。また秋の味覚の1つサンマは、現在北海道で多く獲れていますが、100年後には温暖化で獲れなくなることが心配されています。温暖化によって、移動能力のある種は寒い方向へ移動します。さらに、標高の高いところへも移動しますが、高山植物は、行き場がありませんので絶滅ということになります。

温暖化対策の柱として原発が考えられていましたが、福島原発事故の甚大さから考えて、いつまでも電気を原発に頼ることはできません。お金がかかっても早く自然エネルギーに切り替えることと、電力各社の電力網をつなぐことで、温暖化対策が必要です。使い放題のエネルギーは、節度を持って減らしてゆくことが生物の一員としての人間の義務でしょう。

「久留米の自然を守る会」に初めて参加させて頂きました。 野中町 田中 恭子

河内先生の講演は日常生活に身近な環境問題でした。温暖化対策の一環は安心安全な地産地消の食生活から始まっているのではと考えさせられました。

我が家では、家庭で捨ててしまう生ごみを土に帰して、大地の微生物を増やし、元気でおいしい野菜を育てています。

今では、朝食に自家製青汁を作り、冬はケール、小松葉、かつお菜、人参等、夏は自生したシソ葉、トマト、ピーマン、パセリ、冷凍したヨモギ、蜂蜜やヨーグルト他を入れ少々飲みにくいけれど続けています。春からは朝の虫取りも日課です。又、外出時にマイ箸とエコバックを各々の鞆に入れ持ち歩いています。

これからは、改めて大自然に接し、筑後川を取り巻く久留米の自然を観察しながら、皆様に教わりつつ学ぶ事を楽しみにしています。

会員寄稿

パプアニューギニアで考えた事

古賀 暉人

パプアニューギニア (PNG) の人の顔は アフリカ人とよく似ている。勿論 地域差、個人差はあるにしても 人類学的に近い事を思わせる。15 万年前頃、アフリカの大地溝帯で現生人類は誕生した。その後、音声言語を確立した我々の祖先の一部がエチオピア付近から 6~5 万年前頃 当時は氷河期にあり、陸続きか、浅い紅海を渡って、アラビア半島南岸を歩き、ホルムズ海峡から ユーラシア大陸に上陸した。そして インド洋沿岸経由でスンダ大陸を陸路で 一部は海路でニューギニアに渡り、一部は更に オーストラリアへ 進出したとされる。その頃ヨーロッパやアジアの多くは水で被われ、ヨーロッパ人の祖先は中東地域に留まり、ユーラシア大陸進出は温暖化を待たねばならな

かった。ミトコンドリア DNA の検査では アフリカ人は それ以外の人種よりも 遺伝子の多様性がある。最初のユーラシア進出した人は 100 人程の人数で それから アジア、ヨーロッパ人が派生していれば、当然である。熱い日射の中では 黒い皮ふは DNA の損傷を守り (皮ふがんの発生)、生命にはなくてはならない葉酸の分解を守ってくれる。一方、日射が弱い所に住むヨーロッパやアジアではメラニン色素は紫外線を遮蔽し、ビタミン D 合成が阻害され、骨の障害を生じる為に、メラニン色素の少ない人が生き残る。ほぼ 赤道に沿って移動した PNG の人達は アフリカ人と同じ皮ふの色としても納得出来る。一旦 ニューギニアに渡った人も 低地には湿地帯が広がり、マラリアが蔓延している為に、高地に住む人のみが多く生き残り、数を増やした。1 万年前には、世界に先駆けて、タロイモ、ヤムイモやバナナ等を主とする農業を始めている。クックの初期農業遺跡が世界遺産に指定されている。PNG は高い山々がつながり、高い山や深い谷に人の交流はさえぎられ、文化がさらに進む事はなかった。限られた土地の為、食料をめぐって 隣の村とは 敵対する事が多かったのである。人口が増えれば、戦争を繰り返し、結果として戦争が人口調整になったとも云われる。戦争に勝つためには 村人の団結を強め、村のアイデンティティを強める必要があり、独特の化粧をし、他とは違った独自の言語を作る事となった。また、地域が孤立していた為に 容貌も違う人達を生じた。しかし 殆どはくっきりした二重瞼で、アフリカ人に似た人や色が白くて、直毛であれば ヨーロッパ人と見間違ふような顔もある。一重瞼のアジア人に似た顔は殆どない。いずれにしても 彼らが アフリカ人の直系の子孫だと考えてしまう。また 高地男性の身長は低いが 骨太で 顔や鼻、そし

て手や足が大きく、筋肉質である。一方、貧しい生活の中 肥満の女性が多いのには驚かされる。栄養学に桶の理論と云うものがある。タンパク質は20種類のアミノ酸から構成されるが その内9種類のアミノ酸の一つが低ければ、そのレベルでのタンパク合成となる。ネズミ等のげっ歯類は固い殻に被われた植物の種を食べる。でん粉が主でアミノ酸には乏しいので多くを食べる事でアミノ酸を補う。そして 余分なカロリーを運動で消費する。飼育籠のネズミは意味なく回転ランナーで走るが、実はネズミはよく動き回る事で過剰エネルギーを消費しているのである。運動を止めれば、たちまち肥満になってしまう。高地の人 特に女性はタンパクを取らないから肥満が多いのではないか。昔 食人習慣があった高地のフォアレ族には 海綿状脳症のクルー病が女性に多く発生していたがタンパク摂取が少ないゆえの習慣だったとされる。同じく低栄養状態で発症し易いハンセン病も蔓延していたが そこで指導した宣教師の努力で食生活の改善が得られ、今は両者とも消失している。彼らは男性中心の社会で、狩りでタンパクを補う男性はタンパク質の摂取が適当にあり、女性ほど過食する必要はなかったのではないだろうか。

西洋人はミルクを飲み、肉を食べ、アジア人は魚やトリを食べる。PNGの人達も肉は大好きである。時には 豚を人の母乳で育てるほど大事に豚を飼育するが数は少なく、豚を食べるのは何かイベントの日であり、通常 口には出来るものではない。今でも彼らはサツマイモ、タロイモ、キャッサバなど根菜類のアミノ酸含有の少ないでん粉主体の食事である。地方の市場には野菜が主で魚や食肉は売っていない。人々はスーパーマーケットでオーストラリアやニュージーランド産の食肉を日

本とほぼ同じ価格で買うのである。日本との人件費の比較をすれば、とんでもない高価格であり、普通の人は手に入れる事は出来ず、結局はでん粉主体の食生活となってしまう。それ故 女性に肥満が多いと考える。

東南アジアでは勿論、焼畑をしているビルマ北部の山岳民族ですら ウシ、トリや豚を飼い食料としているのに 何故 PNGでは そうではないのだろうか？ノウハウが分からないからと云うし、なまけものだからともいう。緑が豊かで人口密度の低い国であり、国民の40%も失業者と云うのに 何故家畜を飼う事をしないのだろうか不思議である。海辺の都市 マダンには高地で生産したキャベツ、ニンジン、キュウリ、コショウ、ホウレンソウなどの高原野菜が売られている。売り手はいずれも顔から一目で高地人と分かる人達がわずかな量の商品を売っている。そこから推測するのだが この国には農協や漁協などはなく、貨幣経済、商業そのものが発達していないように思われる。土地は地域の小さな農民が所有している。もし 大地主制となれば 大規模なプランテーションや家畜生産も行われるのであろうが 幸か不幸かそうでない為に農業も遅々として 進まないのかも知れない。



筑後川からの展望 — 筑後大堰上流付近**野口 勝司**

九州の北部平野を東西に流れる九州一の大河筑後川の河畔に立ちて

眼下に見える田畑、集落、林や森、町並越しに川を隔てて山肌青く屹立した雄大な山々、雲海に浮かぶ遠い山々の遠望は天下の絶景と言えよう。

まず、東に首を巡らせば東西に走る耳納の山々青々とした山肌が目に映る。北に目を移せば遙か中空に宝満山が稜線を鮮やかに聳え北西から西へ首を移せば背振山系の山々が山肌も青く並び立ち更に天山が西に聳え雄大な山並の姿を堪能することが出来る。更に西南の空に多良岳が霞んで浮かびその南方雲海の中に微かに雲仙普賢岳の稜線が見え隠れする。

視界東西70Km 南北80Km 広い空間の眺望は天然の絵巻物と言えよう。

自然が織りなす荘厳、雄大な眺望は大地の中心に立つ我が心に感動を呼び起こし大自然の中に吸収されていく何となくほのぼのとした安らぎを感じることで出来る。河川の生態系の調査を継続していくうちに生命の連続性と環境への適応と調和を飾る大自然の妙技に感動するものである。

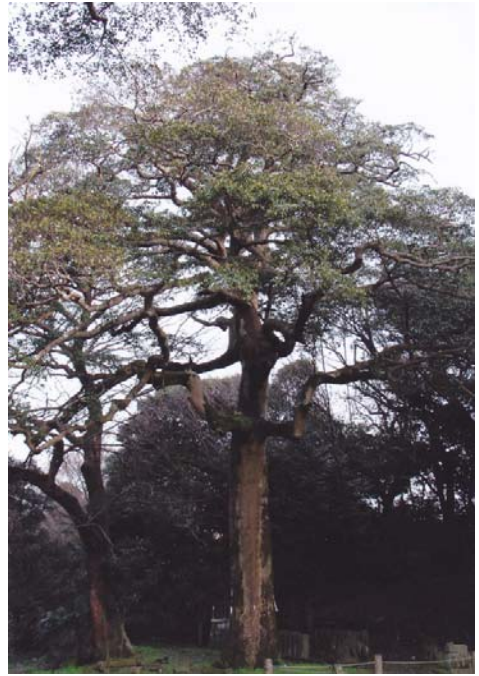
うましみず

味水御井神社のクロガネモチ

久留米市文化財専門委員 高山 美子
県指定 平成20年3月31日 場所 久留米市朝妻味水御井神社境内地 樹高 19.71m
胸高周囲 4.06m

クロガネモチの雄株(モチノキ科 モチノキ属の常緑高木 雌雄異株)久留米市市民の森[指定番号14 指定日昭和52年6月27日]として憩いの場となっている。神社境内地には、昔から豊かな水が湧き出し、夏場も涼しくホタル舞う地にクロガネモチは繁っている。

◎県内最大級の株を見たい方は、JR久大線久留米大学駅北口より歩いて1分。国道210号線朝妻バス停より1分、の街中で。



クロガネモチ

撮影者 池田洋介(筑後川発見館学芸員) 撮影日 2012年3月19日

総会報告(平成24年1月22日)**1、会員数**

平成23年12月31日現在77名

2、例会報告(平成23年)

1月23日

第387回 総会記念講演会 テーマ「グラミン銀行」講師 古賀暉人 場所 久留米市役所3階
参加者数20人

3月27日

第388回 筑後川春の野草を愉しむ会 場所 くるめウス 参加者数50名 共催 筑後川まると博物館運営委員会

5月29日

第389回 高良山樹木の名札付け 雨天中止
6月26日

第390回 キノコの自然観察とキノコ汁会 場所 高良台演習場周辺 参加者数10人

7月18日

第391回 水辺の自然観察会と魚ツチング 場所 高良川下流くるめウス前 参加者数20人

9月3日

第392回 筑後川観月会 場所 くるめウス 参加者数44人 共催 筑後川まるごと博物館運営委員会

10月16日

第393回 ネイチャーゲームと自然観察会 場所 高良山四季の森、森林ツツジ公園 参加者17人 共催 くるめネイチャーゲームの会、久留米市生産流通課

12月4日

第394回 高良山キノコ観察とキノコ汁会 場所 高良山四季の森、森林ツツジ公園 参加者54人 共催 久留米市生産流通課

3、会報「久留米の自然」発行

111号 2011年1月1日、112号5月1日、113号9月1日

4、他団体への協力(平成23年)

7月15日 河川愛護月間展示と発表1人 場所 くるめウス、主催者 筑後川河川事務所・福岡県・久留米市、11月23日 緑のハイキング講師5人 場所 高良山兜山キャンプ場 主催者 緑の市民会議

5、補助金

平成23年7月11日 環境対策支援補助金22万円 福岡都市圏広域行政事業組合より

6、平成23年度収支決算報告

収入の部

項目	決算額	備考
前年度繰越金	195,697	
会費	152,000	2010年分(5人)、2011年分(48人)、1012年分(18人)、

		2013年分(3人)、2014年分(1人)、2015年分(1人)
例会行事費	32,150	講師謝礼を含む 10/16、11/23、12/4
読本代	39,510	ひとつの川から見えるもの、動物笑話
カンパ・利子	81,534	
補助金	220,000	7/11 環境対策支援補助金
収入計	720,891	

支出の部

項目	決算額	備考
会報作成費	137,360	111号、112号、113号
通信費	13,540	
印刷コピー費	4,906	
文具費	33,009	
事務局費	24,350	
行事費	73,213	補助金より
予備費	18,566	
次年度繰越金	415,947	環境対策支援補助金を含む
支出計	720,891	

7、事業計画(平成24年)

1月22日

第395回 総会記念講演会 場所 久留米市役所3階 テーマ 温暖化と食糧・生物 講師 河内俊英氏

3月25日

第396回 筑後川春の野草を愉しむ会 場所 くるめウス 共催 筑後川まるごと博物館運営委員会

5月27日

第397回 高良山樹木の名札付け 場所 高良山南回りコース 共催 久留米市生産流通課

6月24日

第398回 キノコ観察会とキノコ汁会 場所 高良台演習場周辺

7月16日

第399回 水辺の自然観察会と魚ツチング 場所 高良川下流 くるめウス前

9月22日

第400回 筑後川観月会 場所 くるめウス 共催 筑後川まるごと博物館運営委員会

10月14日

第401回 ネイチャーゲームと自然観察会 場所 四季の森経由森林公園 共催 くるめネイチャーゲームの会、久留米市生産流通課

12月2日

第402回 高良山キノコ観察とキノコ汁会 場所 四季の森経由森林公園 共催 久留米市生産流通課

8、会報「久留米の自然」発行予定

1月1日114号、5月1日115号、9月1日116号

9、幹事会兼事務局会議

隔月第1水曜日に開催。午後7時30分より。場所 えーるピアくるめ2階

10、他団体への協力

7月22日 河川愛護月間展示と発表・くるめウス、11月23日緑のハイキング講師・高良山及び兜山

11、平成24年度収支予算

収入の部

項目	予算額	備考
前年度繰越金	415,947	
会費	140,000	

例会行事費	20,000	
読本代	20,000	ひとつの川から見えるもの、動物笑い話の販売
カンパ・利子	50,000	講師謝礼を含む 10/14 11/11 11/23
補助金	0	
収入計	645,947	

支出の部

項目	予算額	備考
会報作成費	140,000	
人件費(講師謝礼金)	30,000	7/16 9/22 10/14
通信費	25,000	
印刷コピー費	5,000	
文具費	30,000	
事務局費	35,000	
行事費	40,000	前年度は補助金より支出
使用料及び賃料	20,000	
備品購入	130,000	
予備費	190,947	
次年度繰越金	0	
支出計	645,947	

12、役員選任

会長・橋田沙弓、副会長・河内俊英・国分謙一、幹事・丸山由紀子・角正博、事務局・古賀信夫・大木武彦・中野昭剛、会計・上野實知子、会報編集・古賀信夫・橋田沙弓・大木武彦・丸山由紀子、会計監査・高山美子・安元康時、顧問・荒巻健二・松富士将和、名誉顧問・丹部竹志

13、書籍在庫

環境教育読本ひとつの川から見えるもの・193冊、動物笑い話・35冊

《行事案内》

◇ 第397回例会：

高良山・樹木の名札付けと豚汁会

4月29日に予定されたものを生産流通課との話し合いで5月27日になりました。

昨年と同じ南回り遊歩道の樹木の名札付けをします。樹木を身近に感じられます。事前に申し込みをお願いします。

[日 時]：平成24年5月27日(日) 雨天中止
 [集合・解散]：10:00 15:00 高良大社前駐車場
 [参加費]：無料 定員20名
 [持参する物]：筆記用具、帽子、お茶
 [共 催]：久留米市生産流通課

◇ 第398回例会：

高良台・キノコ観察会とキノコ汁会

高良台周辺の道路を歩きながら、キノコの観察会を行います。講師金子周平氏(福岡県森林林業技術センター)によるご指導です。事前に申し込みをお願いします。

[日 時]：6月24日(日) 雨天決行
 [集合・解散]：10:00・13:30 上津小学校運動場入口 [参加費]：200円 定員20名
 [持参する物]：水筒、帽子、筆記用具

◇ 第399回例会：

水辺の自然観察会と魚ツチング教室

くるめウス横の高良川の浅瀬で水質と植物と魚類の観察教室を行います。事前に申し込みをお願いします。

[日 時]：7月16日(月・祭日) 雨天中止
 [集合・解散]：10:00・12:30 くるめウス
 [参加費]：無料 定員20名
 [持参する物]：着替え、帽子、お茶、筆記用具

◇ 第400回例会：

筑後川観月会

天体観察と星座、お抹茶も頂きます。事前に申し込みをお願いします。

[日 時]：9月22日(土) 雨天中止
 [集合・解散]：19:00・21:00 くるめウス
 [参加費]：300円 定員30名
 [持参する物]：筆記用具
 [共 催]：筑後川まるごと博物館運営委員会

《事務局だより》

平成24年の総会も終わり新しい年がスタートして早4ヶ月が過ぎようとしています。当会の行事も順調に進んでおり、特に3月に行われた春の野草を愉しむ会では年々参加者が増加しており、またこの会を毎年楽しみにしているというご意見も頂きうれしい限りです。

今年も毎月のように行事が並んでいます。前述の春の野草を愉しむ会をはじめ6月と12月のキノコ観察会が特に人気です。世の中にはキノコを食べたがっている人がたくさんいるようです。

7月の水辺の自然観察会は子どもたちに人気です。高良川下流の浅瀬に入り魚をとったり、水生生物をとったり、水辺の植物をとったり、大人でも楽しいものです。

ま、とにかく今年も例年どおりの行事がありますので、この会報をご覧になる会員の方にはぜひ参加していただくようお願いいたします。(古賀信夫)

ホームページもご覧下さい。

<http://kurumenoshizen.net/>

1. 会員異動

入会 金吉純華(久留米市)

2. 会費納入について

会費は、会の活動を支える源です。まだ、会費を納入していない人は振替用紙(口座番号01750-1-40114)に年会費2000円をご確認のうえ納入をお願いします。

3. 原稿募集

次号116号は平成24年9月1日発行予定です。原稿の〆切は8月1日です。皆さんの原稿をお待ちします。

4. 幹事会兼事務局会議のご案内

幹事会(定例)は原則として奇数月第1水曜日の19:30~21:30まで、えーるピア2Fで行います。皆さんも気軽にご参加下さい。(5月2日、7月4日、9月5日)

久留米の自然

平成24年5月1日第115号

発行 久留米の自然を守る会

発行者 橋田沙弓

事務局 〒839-0827

久留米市山本町豊田 2320-6

TEL 46-8622 FAX 46-8623 (古賀)

印刷 千年屋印刷

TEL 43-2400 FAX 43-2408